

コメント「空海の史実・弘法大師の真実」

大本 敬久 (愛媛大学地域協働推進機構特定准教授)

Comments on "Kukai as History, Kobo Daishi as Reality" Takahisa OMOTO, Associate Professor, Ehime University Organization for Promoting Regional Collaboration

1. 空海の史実

令和7年11月1日に開催された愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センター公開講演会・シンポジウム「空海の史実・弘法大師の真実」において渋谷啓一氏の基調講演「空海・弘法大師の幼少期について」と研究報告の寺内浩氏「空海と辺地修行」、三好賢子氏「空海の姿（御影）について」を拝聴して、改めて、四国遍路の世界遺産登録に向けて「顕著な普遍的価値の証明」のためには、人間・空海がどのような事績をたどったのか。その史実を確定させるとともに、空海の死後に「弘法大師」という諡号が与えられて、その名が広く定着して、「弘法大師」が四国遍路に欠かすことのできない要素となっていくのか。これを時代とともに丁寧に一次史料から確認をしていく作業は重要となってくる。ここでは、3人の講演・報告と重なる部分があるが、空海の史実についてまとめながらコメントをしてみたい。

空海は平安時代初期の真言僧である。幼名は真魚といった。生まれは奈良時代の宝亀5(774)年、四国讃岐国(香川県)多度郡であり、父は佐伯氏、母は阿刀氏である。延暦7(788)年に入京し学問の研鑽を積んだ後、仏道に入り山林修行をし、四国の大瀧嶽(徳島県)、室戸崎(高知県)、石鎚山、出石山(愛媛県)でも修行をした。24歳で『三教指帰』を著すが、これは日本文化史上、個人名で現存する最初の文学作品とされる。延暦23(804)年に留学僧として遣唐船に乗り入唐する。そこで唐の都長安の青龍寺恵果和尚と出会い、師主とすることを得た。空海は恵果について胎蔵界、金剛界、そして伝法阿闍梨灌頂を受け、「遍照金剛」の密号を与えられた。大同元(806)年に帰国し多くの經典や仏具等を請来した上に密教の本義を日本に伝えたことにより、その後の平安仏教の在り方に大きな影響を与えた。弘仁6(815)年、空海42歳(厄年とされる年)に四国を巡り、四国霊場を開創したとの伝承もあるが、平安時代の史料では確認できない。翌7(816)年、嵯峨天皇から高野山(和歌山県)を賜り、金剛峯寺を建立し、同14(823)年には東寺を給預され、真言宗の基礎を築いた。宗教者としてだけでなく三筆の一人に数えられる書家として、『文鏡秘府論』など漢詩論を著すなど文学者として、綜芸種智院の創設など教育者としてなど、様々な分野で大きな功績を残している。

空海が誕生したのは宝亀5(774)年、奈良時代後期である。この時代の律令制下では教団が独自に出家を承認して僧尼となるのではなく、出家得度には朝廷(国家)の許可を得なければならなかった。許可を得ずに出家することを私度僧と呼び、禁止されていた。空海も若き日に山林修行をするが私度僧としての修行であり、正式な出家得度は延暦23(804)年、31歳の時であった。

なお、奈良時代にはいわゆる南都六宗(法相、三論、律、俱舎、成実、華嚴宗)が成立している。後の宗派とは異なり一寺一宗ではなく、一種の学派のようなものであった。後に空海は奈良仏教界とは人的交流で対立は避ける傾向にあり、空海の「御遺告」にて「末代の弟子等に三論・法相を兼学せしむべき縁起」とあるように三論、法相(奈良時代からの仏教)を兼学させることを弟子たちにも伝えているように、三好報告で挙げられた「二宗兼学」をはじめとする真言宗にとどまらない開かれた思想・立場が垣間見える。

2. 空海の系譜と幼少期

渋谷講演では空海の幼少期について詳細に紹介があった。それを補足する上で空海の幼少期の時代背景をおさえておきたい。空海幼少期の奈良時代後期は、庶民にとっては労役、兵役、そして飢饉、地震等の災害に苦しんだ時期であった。延暦3(784)年に桓武天皇が平城京で強まった寺社勢力から距離をおく等の理由

で長岡京への遷都を決めた。新たな都の造成には空海出身地の讃岐国をはじめ伊予国など多くの庶民が遷都に関わる工事に携わっていた。この長岡京も造宮使の藤原種継が暗殺される等したため、延暦13年にわずか10年で再度新しい都城を造成することになり平安京へ遷都し、労役を重ねることになった。

また、宝亀年間以降、朝廷は蝦夷征討を何次にもわたって行った。宝亀5(774)年から弘仁2(811)年まで蝦夷征討が続き、38年戦争とも称されている。多くの兵士が東北地方に派遣され、そして東北地方から四国など西日本に俘囚が移配された。この蝦夷征討の時代が始まった宝亀5年に空海が讃岐国に誕生している。

また、空海誕生の宝亀5年は伊予国、土佐国に飢饉があった年であり、四国全体が飢饉に悩まされていたと推察される。飢饉だけではなく延暦13(794)年には西日本で地震が多発し、京畿内に死者が出るなどの被害が出ている。一説にはこの地震は南海地震とされ、その復旧のため四国に新しい官道が整備されるなど、大きな被害が出ていた可能性がある。空海はこのような庶民の苦しみを目の当たりにしながら成長していったと思われる。そして空海が青年期に修行を重ねていくことは寺内報告で詳細に触れられており、しかも、空海が特定の僧侶や寺院に属していたわけではないという寺内の指摘は重要で、やはり開かれた空海 of 思想・立場や、三好報告で指摘された後世の弘法大師信仰が真言宗に限らない点にもつながっていく。そして四国遍路の霊場自体が真言宗にとどまらず様々な宗派、そして江戸時代には神社も含まれていたり、近世以降に病者、困窮者を受け入れたり、現代では外国人遍路を受容したりする側面にもつながっているといえるだろう。

さて、空海の没年は承和2(835)年であることが朝廷の正史『続日本後紀』にも見えるため確実であるが、誕生年は史料により異なっている。『続日本後紀』には63歳、空海の弟子真済が著したとされる『空海僧都伝』には62歳が亡くなった年齢とされ、誕生年が宝亀4年もしくは5年であると計算できるが、現在では宝亀5年説が定着している。真言宗で行われる50年ごと(江戸時代中期以前は100年ごと)の年忌法要(遠忌)も宝亀5年で起算している。

現在、一般的には空海の出自は宝亀5年6月15日に讃岐国の善通寺付近で誕生し、父は佐伯善通、母は玉寄姫(玉依姫)といわれるが、これは中世以前の史料では確認が難しい。『続日本後紀』に「讃岐国多度郡の人なり。俗姓は佐伯直」とあるように、讃岐国多度郡出身で、父方は佐伯氏であることは確実である。同じ朝廷の正史『日本三代実録』には「佐伯田公」の名前が見え、これが父名として後世、定着していく。空海を含め田公の親族の多くが中央での位階を賜っているため、佐伯氏は讃岐国の郡司クラスの氏族であったと思われる。また母方については『続日本後紀』に舅(母方の兄弟)として阿刀大足が記されており、『御遺告』でも母が阿刀氏であると記されている。阿刀氏は学問に秀でて、高僧を輩出するなど、畿内の有力氏族であった。

なお、空海の誕生地は古来、讃岐国(香川県)とされてきたが、近年、畿内で誕生した可能性を指摘した研究成果が提出されている。平成18年に刊行された空海研究の大著・武内孝善氏『弘法大師空海の研究』(吉川弘文館)において、讃岐国には空海の母方の・阿刀氏が住んでいた記録が見当たらず、阿刀氏は畿内に居住しており、しかも空海が誕生した当時の婚姻形態は妻訪婚であり、母と子は結婚の形をとってから約10年は母方一族と生活していたのが一般的であったことから、誕生地は畿内であると推定された。また父方の佐伯氏は船を用いた交易活動を行っており、その交易拠点が住吉津(現大阪府)にあったことも挙げている。このように誕生地については畿内である可能性が注目されているが、いわゆる「出身地」については『三教指帰』や『続日本後紀』など平安時代初期の史料に讃岐国であることが記されており、「讃岐国の出身」であることは間違いのないといえる。

そして、10代の空海が阿刀大足から学んだ事は『続日本後紀』には「文書を読習す」とあるのみで詳細は記されていないが『空海僧都伝』(空海寂後約半年の承和2(835)年10月2日に弟子真済が記したと書かれるが、実際には天安2(857)年10月22日の大僧正追贈までの約20年間に成立したと考えられる)には「論語、孝経及び史伝等を受け、兼ねて文章を学ぶ」とある。空海は18歳で大学に学び始めるが、それまでに基礎的な学問を修めていた。大学に入る前の少年時代から本格的な学者から学ぶ環境にあったことは当時の僧侶の中では珍しいと言える。当時の大学では大経として『礼記』、『春秋左氏伝』を、中経として『毛詩(詩経)』、『周礼』、『儀礼』を、小経として『周易』、『尚書』が定められていた。空海は大学の明経科で大学博

士の岡田牛養から『春秋左氏伝』等、直講の味酒浄成から『五経』等を学んだと『空海僧都伝』に記されている。大学に入って後、空海は仏教の道に深く入り、大学を離れて山林修行を行うが、もともと学問を教えていた阿刀大足はそれに反対していたと思われる。『三教指帰』序文に「ここに一多の親識あり、我を縛するに五常の索をもってし、我を断るに忠孝に乖くということをもってす」とあり大足も「一多の親識」（親族）の一人であったと推測できる。

3. 「弘法大師」諡号と弥勒浄土

空海が承和2(835)年3月21日に高野山で没したことは『続日本後紀』に明記されている。弘仁7(816)年に開創を勅許された高野山では伽藍の建立が進み、空海59歳の天長9(832)年8月にはじめて万燈万華会を修するまでに至った。その願文が『性霊集』巻八に所収されているが、そこで述べられたのが有名な言葉「虚空尽き 衆生尽き 涅槃尽きなば 我が願ひも尽きむ」である。衆生の救済されない以上は自分は旅立たないという宣言でもあった。空海は同年11月に高雄山寺を弟子実恵、真済に任せ、翌天長10年には真済に高野山経営を真済に、東大寺真言院等は真雅に付嘱して、高野山に隠棲した。承和元年の年末から年始にかけて宮中真言院で後七日御修法を修することに奔走し、真言宗年分度者3人が認められ、真言宗が教団としての枠組みを確実にした直後の3月に没することとなった。空海が没したとしても死したわけではなく「入定」（禅定に入る、つまり煩惱を去り、無我の境地に入ること）したとされる。空海の遺言とされる『御遺告』では「閉眼の後には必ず方に兜率他天に往住して弥勒慈尊の御前に待すべし（中略）未だ下らずの間は、微雲管より見て、信否を察すべし」とあり、弥勒菩薩のいる兜率天で雲の間から人々の信仰、不信を観察すると述べている。空海は現在でも禅定を継続し、高野山奥の院御廟や東寺において毎日、生身供が供えられ、また四国遍路においては同行二人とって遍路とともに四国を巡っているとされている。

『日本文徳天皇実録』天安元(857)年10月丙戌条によると、空海没時の僧綱は「大僧都」であり上の「僧正」には任じられていなかった。本条は天安元年に弟子の真済が僧正となる際のもので、真済は空海が僧正に任じられていなかったため辞したが、文徳天皇はこれに感激し空海に「大僧正」を賜ることとし、真済も僧正となったことが記されている。ただし、その時期でも空海は「弘法大師」の諡号を朝廷から与えられていたわけではなかった。

日本では「大師」諡号の例は貞観8(866)年、最澄に「伝教大師」、円仁に「慈覚大師」が贈られたのが最初である。それに対し、真言宗では遅れること半世紀、延喜18(918)年と21(921)年の二度、朝廷に対して東寺長者の観賢が空海に「弘法大師」を賜ることを朝廷に強く奏請し、『日本紀略』延喜21年10月己卯条に記されるように「弘法大師」諡号が実現した。それに対抗するように直後の延長5年(927)には天台宗側では円珍に「智証大師」が賜られるなど、この時期、天台、真言宗において大師号を競って上奏していた。900年前後は先に最澄、円仁が大師号を賜るなど、天台宗の勢力が伸長しており、最澄没後に密教教義の体系化が進み、貴族社会に浸透していった。真言宗では空海没後、空海からの直接的影響も弱まり、京から遠い高野山への関心も低下してきたことが要因となり、弘法大師号の上奏はその復隆活動に位置づけられる。その後、仁海の尽力で治安3年(1023)の藤原道長による高野参詣が実現し、貴族社会での高野山信仰が高まるきっかけともなった。後世の成立となるが、空海の生涯や業績を表現した「高野大師行状図画」に「贈大師号」の場面が描かれる。醍醐天皇より空海に「弘法大師」号が贈られたため、観賢達が高野山を訪れ、「入定」している空海に対面した。空海は髪や髭がのび、衣がぼろぼろのまま瞑想しており、観賢達は髪を剃り、天皇下賜の衣を着せたことが描かれる。この入定信仰は平安後期から鎌倉期には定着し、広く弘法大師信仰の中核譚として語られるようになるが、藤原道長等の高野山参詣の広がりや表裏一体であった。また、空海の遺言とされ900年代前半成立される『御遺告』には空海が死後に弥勒浄土の兜率天に上生する内容が強調され、弥勒浄土信仰が浸透していたことを物語り、1000年代に入って隆盛する弥勒下生信仰にもつながっていった。

以上、空海の幼少期から没後の大師諡号、空海と弥勒浄土について触れてみたが、今回の公開講演会・シンポジウムのように、空海の史実、弘法大師の真実を古代史の立場で時代考証を進める姿勢は、四国遍路をより相対的視点、客観的視点で見つめなおすことにも繋がっていく。今後もこの分野、視点での研究の深化が求められる。